ショバイ・クシ
みんな幸せ

ACEF Study Tour in Bangladesh

2014.2.17-2.26

目次

参加者名簿……2
準備会……3
BDP と ACEF の紹介 ……4
バングラデシュ概要……5
メンバー紹介……6
ツアー日程……9
　17 日　ワクワク・ドキドキ
　18 日　さあ、田舎に行こう to ネトロコナ
　19 日　いざ、小学校へ参らん
　20 日　プーバイルへ戻ろう
　21 日　エクシュ・フェブラリー
　22 日　ヘテヘテしてヘトヘト
　23 日　Happy Happy Happy!!
　24 日　バングラの 3 つの顔
　25 日　アバール・デカ・ホベ
　26 日　とうちゃあああく
BDP スタッフ紹介……20
ベンガル単語帳……22
“ごはん”モジャ……23
出会った人たち……24
感想文……25
編集後記……32

2月21日

この日は今回の目玉！！

エクシュフェブラリィ

エクシュフェブラリィとは、ベンガル語母語運動

ベンガル語母語運動と記念日について

現在のバングラデシュは１９４７年にパキスタンの「東ベンガル州」として、英領インドから独立した。しかしその国家運営は西パキスタンを中心としてなされていた。１９４８年３月、パキスタンのＭ．Ａ．ジンナー総督がダッカにおいて、西パキスタンで使用されているウルドゥー語を公用語とすると演説、それへの反対からベンガル語公用化運動が高まった。そして１９５２年２月２１日（Ekushey February)、ダッカ大学に集まった学生たちの集会後のデモが警官隊と衝突、発砲によって４名の学生が死亡した。この事件がパキスタンからの分離独立の戦い、バングラデシュ建国へとつながっていくこととなった。

この事件を記念する記念碑（セントラル・ショヒド・ミナール）がダッカ大学にあり、またそれを模したモニュメント（ショヒド・ミナール）はバングラデシュ中の学校に建てられている。毎年２月２１日はベンガル言語運動の記念日として国民の祝日となっており、多くの人がショヒド・ミナールに花を手向ける。１９９９年にはユネスコがこの２月２１日を**国際母語デー**(International Mother Language day)に制定、母語の振興を通じて異なる民族・文化間の寛容と尊敬を確立することを、参加１８８カ国の全会一致で宣言した。バングラデシュで行われる記念式典でも自国の歴史を憶えるとともに、世界のあらゆる地における母語尊重の意義が強調されている。日本の池袋にもショビト・ミナルーのレプリカがある。

この母語尊重への意識は、バングラデシュの一人一人に深く浸透している。例えば今回のツアーで主日礼拝に参加したプーバイルのカトリック教会の司祭は、長年にわたってバングラデシュにおける少数民族の言語保存、伝承、辞書の作成に尽力しておられる。その理由について、「言語は民族にとっての母だから、マジョリティの使用言語に吸収されて失われてはならない」と母語の尊厳について語ってくださった。

朝は教会へ。ダッカから司祭が来るということで、祝福ムードでした。

BDP 職業訓練校の学生とお会いしました。

23
SUNDAY

24
MONDAY

スラムにある学校訪問
&
バングラの三越“AARONG（アーロン）”で SHOPPING

オモルさんのお宅へ GO!!みんなで記念写真を撮りました。

プーバイルにある学校訪問とミレルバザールに行きました。

紅茶やチュリなどのお土産をそれぞれ買いました。
昼食後は Wrap up Meeting.
バングラデシュで感じたこと、学んだことなどを共有しました。

そして私たちは、９日間お世話になった、友人たちと最後の挨拶を交わす・・・。

集合写真を撮った後・・・・空港へ★

ばいばーーーい

民族衣装を着て、お家まで帰りましたよーーーーー☆

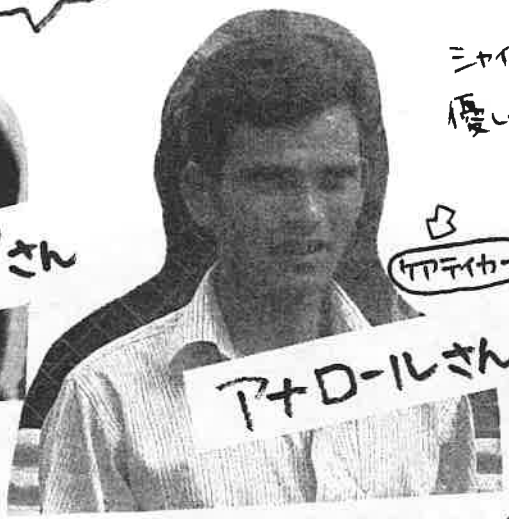
26
WEDNES
DAY

約 10 時間の飛行機の旅を
終えて、、、
羽田空港に到着☆
皆さんお疲れ様でした！！
ドンノバットジャナイ（＾－＾）

in ネトロコナ

ハビブさん

ネトロコナの責任者



アナロールさん

ケアテイカー

シャイだけど
優しいお2人

ヤシンさん

スーパーバイザー

オモルさん

プーバイルの
責任者

みなさん
ごはんですよー

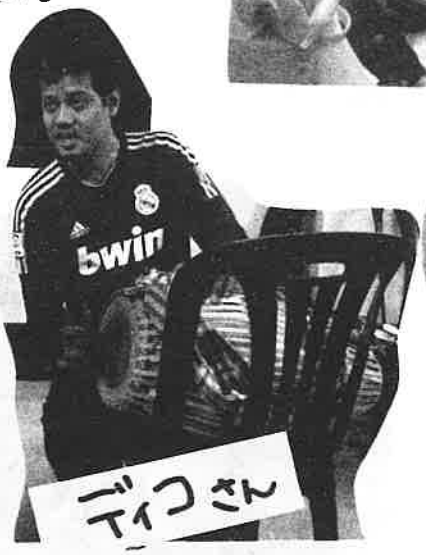
職業訓練校出身の
Cuteな新人

アイリーンさん

アンジェラさん

BDPの
おシャレ
番長!!

IT担当で
大の音楽好き♪



ディコさん

ルチョンさん

ガロ族の
出身で
メカニック

シュハクさん

期待の
New Face

in プーバイル

我らがBDPスタッフを紹介するぜ!!

シーラさん

シオリさんのお姉さん。
10日間、お世話になりました。

アルバートさん

我らがBOSS!!
コチュジャンが大好き!

ちょっと小さい
ダンス大好き
食材の買物
にも行きます

ペモントさん

私達と共に
ネトロコナに3
先生として、とても
頼りになりました!!

アリさん

ラハジさん

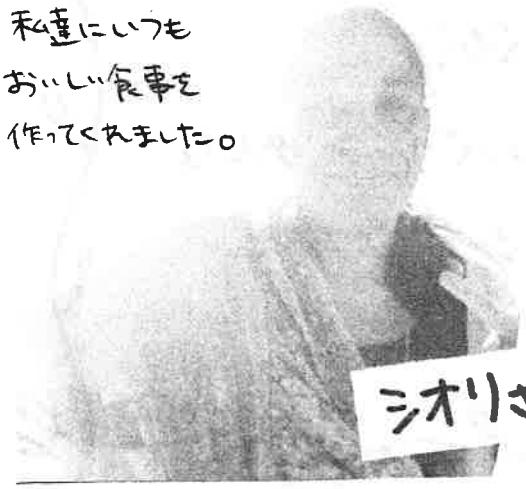
プロバイルの会計係。
エワシュフェブラリーで、
ふうせんを木に
からませてしまう
ハプニングも!

素敵なドライバー
移動中、色々な
ものを買ってくれました。

赤いTシャツが
よく似合う✧✧

ナイトガード
で私達を
守ってくれました

私達にいつも
おいしい食事を
作ってくれました。



シオリさん

ニキルさん

スワハンさん

アロカシュさん

ベンガル語

・覚えておくと便利なベンガル語

アッサラーム アライクム ... こんにちは
(ムスリムの人に対して)

ノモシュカル ... こんにちは
(その他の人に対して)

ドンノバット ... ありがとう

モジャ ... おいしい

シュンドール ... きれい・上手

オシュビダナイ ... 問題ない

アバールデカホベ ... またあいましょう

ナムキ？ ... 名前は？

アマール ナム～。 ... 私の名前は～です。

・他にもこんなベンガル語！

タタ (小さい子供に対して) バイバイ

ビデシー ... 外国人

ボンドゥ ... 男友達

バンドゥビ 女友達

ティック アチェ？ ... わかった？

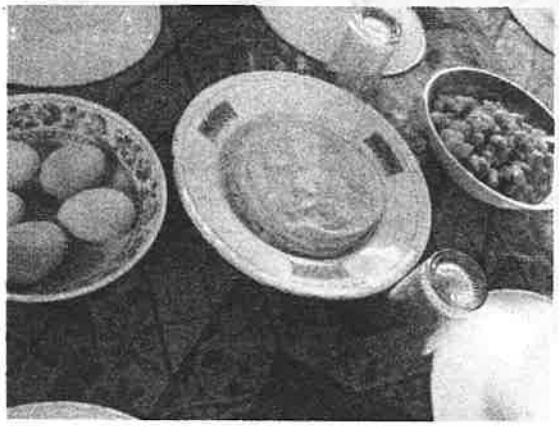
ショバイ ... みんな

クシ ... 幸せ

―番外編―

‘‘ごはん’’ モジャ

美味しい料理はこの台所から生まれます☆



1日何回飲んだかな？？
みんな大好き「チャー」

サモサ→

マンゴージュース

7UP

☆美味しい夕食☆

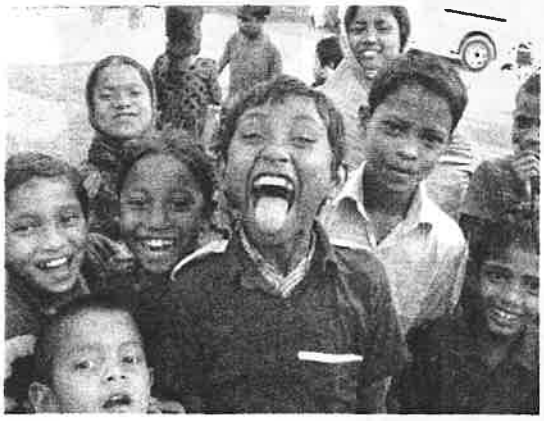
美味しいアイス↑

出会った人たち（＾－＾）

エクシュフェブラリーで出会った子どもたち！！
笑顔が最高です！！

カルチャーショーに来てくれたお友達→

↓←宿舎の前に集まってくれたお友達



就学前のお友達（＾v＾）→

感想文

お・も・て・な・し

深澤　睦実

初めてスタディーツアーに参加したのはまだ高校生 2010 年の夏でした。その時の経験が現在の大学や教会生活において大きな影響を与えています。しかし、もう一度参加するとは思ってもいませんでした。

2013 年の流行語大賞「おもてなし」。日本はおもてなしの国として世界に注目されています。しかしながら、それは外食産業やサービス産業が外国に比べて高いサービスを提供していることからこのように言われているのだと思います。バングラデシュではBDPのスタッフをはじめ、現地の人々は助け合いの心を持ち外国人である私たちのために心からのおもてなしを施してくれます。学校訪問では、子ども達が私たち日本人の訪問を心待ちにしていて、お花をたくさん用意してくれます。また、ネトロコナのオフィスや学校では井戸を使います。そこでは必ず子ども達が水を出すのを手伝ってくれます。マイメーシンのレストランでの食事の際には、スプーンを出してくれました。さらに、ダッカ大学でのエクシュ・フェブラリーでは献花台まで並んでいる中、日差しが強かったのを心配してくれたあるベンガル人の方が日よけに使うようにと新聞紙をくれました。私はこれらのことに非常に感動し、果たして私は日本で外国人などのいわゆるゲストと呼ばれる方にこのようなことができるだろうかと考えました。

現地の家庭を訪れて、その生活に触れる機会も多くありました。そこで気づいたのは、必要なものだけで生活していることです。日本には多くのモノが溢れていてそれが当たり前になっています。むしろそれだけでは満足できずに、それ以上を望み、手に入れようとします。私もその一人にすぎません。10 日間のバングラデシュの生活で私の日本での生活が恵まれすぎているということに改めて気づかされました。

大学生活も残り 2 年となりました。経済政策を専攻しておりアジア経済、開発経済を学ぶためのゼミにも入っています。バングラデシュで感じたことを生かして、学んでいきたいと思います。

おもてなしの国バングラデシュ

荒谷葉月

今回のスタディーツアーで私は初めてバングラデシュという国を訪れた。日本から飛行機で約八時間程度のバングラデシュは、海外に行く機会が少ない私のような人間からするととても未知の場所であったので、行くまではどんな国なのだろうという期待がありつつも、同時に不安でもあった。

私たちが今回訪問したのは主に首都のダッカにあるプーバイル、田舎のネトロコナだった。最初に感じたことは、都会の方は「意外にも発展している」ということだった。話を聞くとこの数年でとても発展してきているようで、途中に寄ったアーロンというデパートは、上級階級の人しか入れないデパートだったが、そこは日本でみるデパートとほとんど変わらない外装だったりもした。それでもやはり交通機関はまだしっかりとしたルールができていないので、車間距離はほぼゼロに等しかった。

私たちは現地の方々にとてもお世話になった。BDP の方々は毎日の食事は私たちの口に合うように辛さを調節し、そのほかでは危険から守ってくださった。このツアーで私のなかで一番印象が強かったのは、BDP の小学校に行くとたくさんの子ども達が私たちに綺麗なお花をプレゼントしてくれたことだった。綺麗なお花といっても、それは決してお店で買えるような花束ではなかったが、見知らぬ顔の私たちであっても、彼女たちは客人として私たちをこころよく迎えてくれる。ネトロコナでは道を歩いていても、近所の人々が「是非うちに寄って欲しい」と自分の家に招き入れてくれ、いきなりで何も用意できていないにも関わらず、自分たちの生活している家を見せてくれた。日本ではなかなか目にできない光景であったためとても驚いたが、このように私たちをもてなしてくれたことをとても嬉しく思った。

発展をしていくことは、いいこともたくさんあるかもしれない。しかし、発展に犠牲はつきものであるという事をここに来て思い知らされた。先進国と言われる日本で暮らしていた自分たちは、あるものに満足するということを忘れていたのではないかと思う。決して便利な生活をしているわけではないネトロコナの人たちの、毎日を感謝して生きているその姿勢を私たちも思い出さなければならない。私はバングラデシュに来てたくさん刺激を受けた。そしてたくさんの笑顔を見てたくさんの友人ができた。このことは私の人生においての大きな収穫だったと感じた。このような機会をもてたことを、両親、ACEF の方々、BDP の方々や関わってくださった人々に感謝したい。

ドンノバッド　ジャナイ

すべての人にありがとうを

東京神学大学院　一年　鄭　なおみ

5年前の春、私はACEFの事を知りました。そして、参加者の話を聞き、いつか私も行ってみたい国の一つになっていました。今回、行きたいと願っていたバングラに行ける事になり、私は、期待と不安半分で、このスタディーツアーに参加しました。

バングラデシュでは、本当に多くの事を感じ、学び、触れました。話したらきりがありませんが、今回は、バングラデシュの人々とのふれあいから、感じた事を記そうと思います。

バングラデシュの人は、人が本当に大好きです。空港に降りたった時から、その事を感じさせられます。そしてBDPのスタッフ、学校に通う子どもたちの家族、近所のおじさん、みんな暖かく私たちを迎えてくれました。自分の住む家を見せてくれたり、家に咲いている花を見せて、お土産に持たせてくださったり、たった9日間でしたが、彼らからあふれ出る愛を感じました。バングラと私たちの住む日本では、住む環境、学ぶ環境、食、衛生などの生活環境が異なります。日本は彼らの50倍も物質的に豊かです。しかし、彼らには、物質的な豊かさではなく、心の豊かさがあります。人を思いやり、家族を愛し、学校や住んでいる村、国、世界を愛する心を持っているように感じました。

先進国に住んでいる私は、学校で学ぶ時感謝していただろうか？一日三回の食事を心から感謝していただろうか？たくさんの事を彼らから考えさせられ、自分自身を振り返る時を与えられたように思います。

そして、子どもたちの目が私の心を掴んで離しません。純粋に笑い、輝き、未来への希望にあふれた大きな目でした。教室に入ると始めは外国人であるということで、恐怖心を抱きますが、一緒に勉強し、遊ぶ事を通して本来の子どもたちの目を見る事が出来ました。子どもたちの目は輝いています。学べる事を感謝し、大きく羽ばたこうとしている子どもたちがたくさんいます。あの子どもたちの目をこれからどのように守ってあげられるのだろうか・・・。近代化が進んできたバングラデシュで、子どもたちの未来をどのように守り、開いていけるのだろうか・・・という事を学校に行くたびに考えさせられました。近代化すると言うことは、人間にとって生活が便利になり、住みやすくなるということでもありますが、その反面、貧富の差は広がり、貧しい者は、さらに貧しくなり、ストリートチルドレン、スラム街が増えていく、ということもあります。私は、遠い国バングラデシュが今回のツアーによって「遠いけど近い国、心の国」となりました。私の心の国バングラデシュに住んでいる多くの人が、良い近代化によってさらに幸せになる事を願ってやみません。多くの事を考えさせてくれた彼らにドンノバッド。

この10日間は、彼らの暖かさ、スタッフの配慮、共に参加したメンバー、出会った多くの子どもとその家庭すべての人から、学んだ日々でした。そして、5年越しにバングラデシュに連れて行って下さった主に心から感謝して、そしてすべての人に感謝して、「ドンノバッドジャナイ」これからもバングラを心に抱き、祈りたいと思います。

バングラデシュ　スタディツアーに参加して

小海　光

目をつぶると、緑一面にひろがった田んぼのあぜ道を　はだしやサンダル履きの子ども達が走ってくる姿が浮かんで来ます。ネトロコナの風景です。
ダッカから北に車で７時間ほど走ってついた田舎の村で，２泊しました。そこでの生活は本当に質素で、トイレや電気はもちろん、水も井戸からくみ出します。そんな生活は、今では日本では考えられないようですが、私はとてもいろいろなことを学ばされました。生活が質素になればなるほど、お互いの助け合いが必要になります。井戸から水を汲んで使うには、１人ではできません。誰かが、だれかのために押し上げなければなりません。トイレの中で突然の停電になれば、誰かが明かりをわたしてあげなければなりません。いすがなければ譲り合い、でこぼこした田舎道を力車で行く時、上り坂やぬか道に来れば、力車から降りて歩いたり、時には一緒に力車を押したりしなければなりません。

日本では私達の生活は清潔で、便利で、物は豊富にあるけれども、何かを一緒にしたり、お互いに助け合う機会があまりにも少ないことにあらためて気づかされました。私達が、お互いを必要と感じ、お互いの存在に感謝することができなくなってしまっていると思うのです。だから、ネトロコナで、またバングラデシュで出会った人たちが、みなとても純粋に、私達の訪問を喜んでくれて、一緒にいすに座って授業を受けるようにと、席を空けてくれたり、質素な家の中まで手を引いて行って見せてくれたりと、私達が一緒にいることを素直に喜んでくれる姿はとても新鮮で、私をも幸せな祝福に満たしてくれました。本当の幸せは、物の豊かさや、便利さによるのではなくて、それを分かち合う人がいることだとつくづく思わされました。

今回のスタデイーツアーは、少ない人数での小さなチームだったそうですが、かえって７人それぞれの参加者とよく知り合える機会になり、また、朝晩の礼拝とシェアリングの時は、お互いから学び合えるとても良い時間になったと思います。

BDP の皆さんには、すべてにお世話になり、いつも笑顔で世話をしてくださったことに感謝です。スタデイーツアーはバングラデシュでの１０日間だけではなく、実は日本に帰ってからも続いていて、私の周りの生活、日本の社会をよく見て、何が私にできるのかを考えていくというかたちで今も続いていっているのだと思います。共に生かされ、生きて行く事の意味と責任を思いつつ、これからの BDP の活動と ACEF の働きを応援して行きたいと思います。すべての恵みを主に感謝しつつ。

2月21日（国際母国語デー）に参加して

前田 恭子

ACEFでの仕事として、スタディツアーへの参加は7回目となりました。 名前だけ知っていた国が、これほど身近になり、たくさんの友と呼べる人ができたこと、自然に受け入れているのですが、良く考えると大きな恵みだと思います。 毎回の参加者からも、BDP のスタッフからも、又訪問する先々で多くを学びます。

今回は2月21日（国際母国語デー）がツアーの中に含まれていたので、その行事に参加することができ、改めて「バングラデシュ」（ベンガル語の国）の意味を深く考える機会を得ました。

1947年に英領インドから独立し、パキスタンの一部として東パキスタンという国だったバングラデシュは、同じパキスタンの西パキスタンから抑圧を受けていました。 西パキスタンの公用語であるウルドゥ語を東パキスタンでも国語とするようにと強要されていたのですが、1952年 2 月 21 日、当時の西パキスタンの首相が来訪した際、抵抗運動をしていたダッカ大学生 4 名が、大学構内で、首相と共に来訪していた西パキスタンの警察官に射殺されると言う事件がありました。 その後、抵抗運動が広がり、1971 年にバングラデシュとして独立を果たしたのです。

言語のために血が流された、稀有な例です。 今も、2 月 21 日には、全国の学校で記念式典が行われ、ダッカ大学構内にある記念碑に花を捧げるために、多くの人々が訪れます。 一日中花を捧げるために何万と言う人が列をなし、この日の意義を子どもたちに伝えるのです。 この日は、ユネスコによって、1999年に「International Mother Language Day」に制定されました。

普段何気なく使っている自分の国の言葉、奪われることなど考えたことがありませんでした。しかし、ベンガル人のベンガル語に対する愛着に触れ、言葉こそ「国」であり、アイデンティティであると感じます。

人間も世界も、長い歴史の中で育ってきたのです。 つい最近まで植民地や人種差別がありました。。 1868年にやっと明治元年を迎えた日本も、その頃の諸外国も、それまでの価値観の中で自国の繁栄を考え、自国の領土を増やし、領土を自国と同じにするために国語を変えることを強要した歴史があります。

それがいかに間違った考えであるか、今の私たちには分かります。 自分の母国と母国語を大切にし、その上で違った国々の人々と、国境を越えて支えあい共に生きることを、グローバル化と言うのではないかと思います。

私も、BDPの方々と共に、子どもたちの未来が明るいものになるように働かせていただくためにも、バングラデシュの人々や文化に敬意を持ち、美しいベンガル語を少しずつ学びたいと思っています。 同時に美しい日本語も大切にしたいと思います。

初めて参加した「ショヒドミナル」の式典

井上儀子

ACEF の仕事に関わって 21 年、この 21 年間の中で初めて、バングラデシュの大事な行事である国際言語運動の日のイベントに参加することができました。それは 2 月 21 日の出来事です。ベンガル語で 21 日にという「エクシェ」という響きをベンガル人は特別な思いを込めて表現します。「エクシェフェブラリー」の言葉の入った歌、詩は数えきれないほどあります。

１９５２年の２月２１日、この日の出来事が独立戦争のきっかけとなったのです。当時東パキスタンの人々の言語はベンガル語であったにもかかわらず、政府は西パキスタンの人々の言語であるウルドゥー語を公用語に定めようとしました。この事に反対して抗議のデモを行った学生７名が警官隊の発砲により命を落とし、その事件から民衆に火がつき、やがては独立運動へと発展していきました。学生 7 名のうち 5 名はダッカ大学の学生であったことから、ダッカ大学の敷地の中に「ショヒドミナル」という言語運動犠牲者のためのモニュメントが建てられ、毎年この日にバングラデシュ国民は追悼を込めてお花を捧げに行きます。2 月 21 日の朝 0 時 1 分に首相がまず花輪を捧げ、その次に野党の党首たちの花輪が続き、一般の人々にと続きます。ダッカ大学のキャンパスの中に入る手前から車は遮断され、歩いて行進が続き、モニュメントの手前では靴を脱いで裸足になります。各団体ごとに横断幕を掲げつつの行進なので、ニュースレポーターやカメラマンに取り囲まれながら、他団体の人たちと言葉を交わしながら和やかでもあり、また押し合いへし合いで殺気立ってもあり、複雑な思いでした。

このモニュメントはすべての学校の敷地に建てられています。BDP 寺子屋小学校でも、各学校で 2 月 21 日の行事がされたことと思います。ネトロコナ地区でも 2 月 20 日、私たちがダッカに帰る日の朝、BDP 小学校の校庭では「ショヒドミナル」の飾りつけと式典の準備をしていました。また前日には「エクシェフェブラリー」の歌を練習していました。

ダッカ大学でモニュメントの前にお花を捧げた後、いくつかのテレビ局のインタビューを受けました。この日はバングラデシュの人々にとっての国際言語運動の記念日と思っていましたが、現在は国連で定められた国際母語デー（International Mother Language Day）であることを知らされました。世界のあらゆる言語を守るため世界中にこのモニュメントを広げる運動がなされているそうです。日本では東京池袋公園にこの碑が建ち毎年イベントが行われています。バングラデシュの人々が母国語を愛し母国語を守ろうとした勇気を思い、私たちも日本語を愛し、日本語を粗末にしないで、日本語に誇りを持ち、日本古来の美しい言葉を大切にしていきたいと心から願いました。

「与えられた自由を、いかに用いるか」

松本　周

今回のスタディツアーで初めてバングラデシュを訪れ、感じたこと、考えさせられたこと、考えさせられ続けていることは山のようにあります。その中から、ここでは一つのことに絞って記します。

プーバイルからネトロコナへの移動前に行われたオリエンテーションで、アルバートさんからスタディツアーメンバーに向けて、次のような語りかけがありました。「これから行く場所での生活は、皆さんの普段の日本での生活とは相当異なっているでしょう。パーソナルな部分が殆どない。部屋もシャワーもトイレも共同、井戸水での生活は他者との協力が欠かせない。こちらへ戻ったら、その経験が皆さんにとってどんな意味を持ったか語り合いましょう。」この言葉が不思議と私自身の心に残り、ネトロコナでの日々を過ごしました。共同生活そのものは日本でも修養会などでは経験することでもあり、同室のヘモントさんとのたくさんの会話でも教えられることが多く、楽しく有意義な経験ばかりでした。

ただアルバートさんの言葉から、私は新たな気づきを与えられました。それは電気・上下水道完備の生活が〈自由〉時間をもたらしているということ、またその結果としてのパーソナルな生活様式が、私たちの生活の中から〈共同性〉を失わせているということへの気づきでした。そして私の頭には聖書の言葉が浮かびました。「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい」（ガラテヤ書５章１３節）。担当した晩祷の際にも、この聖書箇所から語らせて頂きました。

日常の生活では当然のようになっていて見過ごしていたもの、しかしそれは与えられたものとしての〈自由〉であった。そしてその自由をいかに用いているのか？　もしそれを「肉に罪を犯させる機会」としているなら、それは〈欲望の奴隷〉になってしまっているのであって、真に自由を生きていることにはならない。そして御言葉は自由の用い方として「愛によって互いに仕えなさい」と勧めています。新しい〈共同性〉構築への道筋がそこに示されています。

プーバイルに戻ってから結局、このことについてアルバートさんと語り合う時間はありませんでした。しかしそうであったからこそ、このことは今でも私の中に問いと課題として響き続けています。神の国を目指し、アジアの隣人と共に生きる歩みにおいて、自分に様々な仕方で与えられている〈自由〉を、「愛によって互いに仕え」るためのものとして、いかに用いていくべきなのか。祈りつつ、この問いと向き合い続けていきたいと思っています。

編集後記

みなさま、お疲れ様でした。
編集会議の参加率が悪くてごめんなさい m(･__･)m
バングラで過ごした時と同じノリで楽しくできました。
むつみ

羽田空港でSTチームが解散してから一カ月以上経過
報告書作成のためACEF事務所で久しぶりに女子大生3人組が揃ったら、、、
そのあまりのハイテンションに圧倒され、バングラデシュではこれが毎日だったなぁと思い出したのでした。
(しゅう)

みんなで集まっての報告書作成は、にぎやかでとても楽しかったです♪
バングラに行って自分の中の世界観が 180℃変わりました！
ぜひ皆さんにもたくさんのことを、行って、感じてほしいです。
はづき

もう一度バングラを想い、心を新たにされました。
とても素敵なバングラをこの報告書を通して多くの方に知っていただきたいです(^v^
祈ってくださった方・そしてすべてを導いてくださった神様に感謝して･･･　ちょん

バングラデシュに寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。

ACEF 会員募集

個人会員	年額１口	5,000 円
団体会員	年額１口	50,000 円
学生会員	年額１口	2,000 円
一時寄付	随時	金額自由

郵便振替　00100-0-185540
特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金

〒169-0051　東京都新宿区西早稲田 2-3-18-26
TEL. & FAX. 03-3208-1925
E-mail:acef@acef.or.jp
http://www.acef.or.jp